



はじめまして、
悪魔です



佐川 凜

ビルの屋上。そこから見える夜景は、空にまたたく星たちよりも多い光を放っていて、美しいがどこか虚ろに見えた。

交差点を行き来する車。電話相手にペコペコと頭を下げながら走っているサラリーマン。iPhone片手に前も見ない通行人。

「世も末ね・・・・・・・・」

ポツリとつぶやいた女性。古びたワンピースを着ているが、これが彼女の一張羅だ。

彼女の名前は 小野 美恵。仕事で貯めた金を、彼氏に巻き上げられたのだ。借金が膨らみ、いっそ死んでしまおうと自殺を図っている。

「こんな世界なら、死んだ方がましだわ」

またポツリと呟いて、屋上のはしまで歩いていく。

「彼氏もいなくなった」

屋上の隅にたどり着く。

「お金もない」

ハイヒールを脱いで、きれいに揃えた。

「生きる希望も、なくなったわ」

ビルのふちに上った。

そのまま、飛び降りようとした。

そのときだった。

「死ぬんですか？」

だれかに呼び止められ、美恵は足を止めた。

振り向くと、そこに立っていたのは一人の男だった。

としは27、8歳と言ったところだろうか。真っ黒なスーツをきていて、頭にはこれまた真っ黒なオーバーライドを被っている。右手に藍色の煙管を持っていた。

帽子のしたから覗けた顔は、結構かっこよかった。

闇のように真っ黒な髪、漆黒の切れ長の目。だが、決して目つきが悪いのではない。むしろニコニコと笑っている。

「そうだけど？ 他人にあれこれ言われる筋合いはないわ」

男から目をそらし、再び夜景に目を向ける。

「はは、違いありません。といっても、私はあなたに『死んではいけない！』などと、きれいごとをおしつけるつもりもないんですよ」

男は、煙管をふうっとふかせた。

「なによ、それ。ふつう、人が自殺しようとしてたら止めるでしょ？ あんた、それでも人なの？

」

男の方は見ずに、美恵はイライラしながら言い返した。

すると、男はククク、と笑った。

「自殺しようとするのを、止めて欲しいんですか？私が止めると期待しているんですか？そこに立っている覚悟が本物なら、私のことなんて無視して さっさと飛んでしまえばいいじゃないですか」

スラスラとそんなことを話してしまう男が、美恵はだんだん怖くなってきた。

「言っておきますが、私はあなたを止めません」

そこまで言われて、美恵は何か言い返そうと振り向こうとした。

そのとき、強い風が吹いて、バランスを崩した。

落ちる・・・っ！

ギュッと強く目をつぶっていた美恵だったが、そういう感じはしなかった。

閉じていた目を開くと、そこには男の顔がアップであった。

男が、美恵の腰を支えていたのだ。

「私はあなたに死ぬなどとは言いません。 というより、せめて契約してから死んでいただきたいんです」

男は美恵の体勢を戻すと、まずそう言った。

「・・・・・・・・あんな、本当に何なのよ？」

美恵は警戒心バリバリで、男に尋ねた。

男はにやりと笑ってから、煙管を吹かせた。

「私は、地獄会社『GEHENNA』の悪魔社員で、名を轟と申します。 小野 美恵様と、契約をするために参りました」

轟と名乗る男はうやうやしく頭を下げた。

「契約？」

「ええ。ほら、よくあるじゃないですか。願い事を叶える代わりに魂をもらう、っていうやつですよ」

「え、魂とられるの？」

「はい。そのかわり、願いを一つだけ叶えて差し上げます。魂一つで願いが叶うんだから、安いものじゃないですか」

「いや、結構な代償よ？ っていうか、叶えてもらえる願い事って一つだけなの？」

「はい。3つだった時代もあったんですがね、あなた方人間が とてつもなく自分勝手な願い事ばかりするものですから、我が社の本質にあっていなかったもので」

「我が社？」

「ええ。私の勤める地獄会社『GEHENNA』は、生きる目的を失った人々の魂を回収することを職業としております」

「たまに気になってたんだけど、悪魔って魂もらったら、その魂をどうしてるの？」

轟はうーん、と唸ってから、口を開いた。

「それは、企業秘密なんです。人間のあなたには関係ないし、知るべきでもない。というより、知ったところであなた方人間にはとても理解できないのですよ」

「そういうものなの？」

「そういうものです」

煙管をふかしながら、轟はニコリを笑い返した。

「ってというか、悪魔って普通に人の形をしてるの？もっと禍々しい姿を考えてたんだけど」

「ああ、人間は大抵そう考えているようですね。ですが、悪魔にも種族がいるんですよ。トカゲみたいな悪魔もいれば、私のように角と尻尾だけがある悪魔もあります。あなた方人間も、肌の色が違ったり、目のいろが違ったりするでしょう？それと同じです」

納得がいったような、いかないような微妙なところだった。

「それより、もうよろしいですか？契約しても」

轟は、少しイライラしているようだった。

どうせ死ぬつもりだったんだし、悪魔に魂を売ろうが、ビルから飛び降りて死のうが、大して代わりはないと思った。それどころか、たった一つでも願いをかなえてから死ねるのだから、そっちのほうがいいと思った。

「いいわ。契約してあげようじゃないのよ」

「かしこまりました。では・・・・・・・・」

そういうと、轟はぶつぶつと呪文のようなものを唱え始めた。とても低い声で唱えるので、呪文を聞き取ることではできなかった。轟の目の前に、稲妻のような電気が生まれた。電気はパキパキと音を立てて、宙に何かを作っている。

電気がやむと、作られた何かは轟の手にぽとりと落ちた。

それは、銀色のチェーンで琥珀のような宝石のついたペンダントだった。宝石は、鬼灯の筋のような銀色の金属で籠のように閉じ込められており、それはそれは細工が凝っていて、美しかった。

「これは、契約の際に貴方に着けていただくものです。まあ、アクセサリ一状の契約書、とても言いましょうか」

轟は煙管を口にくわえながら、ペンダントを美恵の目の前に掲げて見せた。夜景の光が反射して、宝石は怪しい光を生み出した。

「・・・・・・・・お金よ。お金をちょうだい。この世で一番の大金持ちになれる金額のお金よ」

それが、美恵の答えだった。

彼氏にだまされ、必死に働いてためた金を一気に奪われ、しかも借金まで押し付けられた。

世の中、所詮金だ。「愛さえあれば なんにもいらない」なんて、口先だけのきれいごと。殺し屋なんて、金さえもらえれば 人を殺しているじゃないか。

「本当に、いいのですか？」

轟は悲しそうな顔をして、美恵に尋ねた。

「本当に、その願い事でいいのですか。もちろん どんな願い事をしようが、それはあなたの自由。ですが、かなえられる願い事はひとつだけなのですよ？ この願い事をかなえても、その後はあなた次第。最終的にあなたが幸せになれるかは、保障しません。 それでも、その願い事になさるのですか？」

「ええ。 世の中、どうせ金なのよ。 金さえあれば 人を殺す人だっているわ」

「・・・・・・・・私は止めましたよ？」

そう言っても美恵の表情は変わらないので、諦めたように轟はペンダントに手をかざした。すると、琥珀色の宝石が輝き、宝石が海のような深い青色に変わった。

「あなたの最期に、幸あらんことを」

地獄会社「GEHENNA」

「人とは、なんであも金に執着するんでしょうねえ・・・」

目の前に置かれた日替わり定食のカツ丼を見つめながら、轟は独り言のようにつぶやいた。

ここは地獄会社「GEHENNA」の社員食堂。日替わり定食や、麺類、どんぶり、とにかく和食に限らず、幅広いメニューが楽しめる。

会社内で轟は帽子を脱いで、頭の小さな2本のシワのようなものが刻まれている角が黒髪の間から覗いている。ネクタイも少し緩めて、完全に休憩モードだ。

この会社に勤める悪魔は、人間相手の仕事をしている。なので、会って早々人間をビビらせ無いうように帽子をかぶって角を隠し、尻尾を腰に巻きつけた状態で話したりするのだ。

「そうねえ。まあ、人間って結構現金なところがあるから・・・。そういうものなんじゃないかしら？」

轟の右に座っている、等々力と同期の仕事仲間であり、「GEHENNA」で数少ない女性社員の一人である咲。こちらも真っ黒な髪だが、瞳は金色。外国の悪魔と日本の悪魔のハーフである。髪の毛をハーフアップでおだんごにしてまとめている。頭には左右に小さな2本のツノが生えている。轟とは違って、ツヤのある角だ。

「そうでしょうか。だとしたら、今時の人間は、随分と悲しい生き物ですね」

「あら。私たちだって、もしかしたら人間から見たら『悲しい』かもしれませんわよ？ 価値観なんて、それぞれ全く違ったものを持っているんですもの」

「なるほど。そう考えたら、妥当なのかもしれませんね」

カツ丼を食べながら、轟はうなづいた。

「なになに？なんの話～？」

そういいながら、咲のとなりに野菜を中心とした、超ヘルシーな料理ののったプレートを置く人物がいた。

「なんだ、お前か」

轟はその人物を見ると、眉間に深いシワを寄せて相手を睨みつけた。

「なんか文句でもあるかよ。凶悪なツラしやがって」

相手も、負けじと言い返す。

「あなたさえいなければ、私だって普通の顔してますよ。っていうか、なんですかその草食動物の餌みたいな食事は？あなた、とうとう虫にでも転職しましたか？」

「はあ？虫なんて職業じゃねえし。つーか、虫が草しか食べないと思ったら大間違いだからな？虫を食べ虫だっているんだからな？」

「じゃあシマウマですか？キリンですか？牛ですか？反芻してろ、草食動物」

「お前こそ、よくそんな脂っこいの食べられるな！？それと、少しは先輩を尊敬するとかしたら！？」

彼の名は響。轟の先輩である。何かと顔を合わせれば、轟と喧嘩している。だが、目つきや黒髪や体格など、さまざまところが轟と似ているのでよく兄弟と間違えられる。ふたりにしてみれば、それが嫌で嫌でしかたがない。

ちなみに、性格は女好き。妻はおらず、しょっちゅう遊びに行っている。だが、彼女を作っては浮気をし、別れ、浮気を下女性をも浮気をし……………。

どうしようもない悪魔である。

「尊敬はしていますよ」

「え、マジで!？」

「ええ。懲りもせずに女性をとつかえひっかえできる、その気色悪い根性をね」

「それ、絶対尊敬って言わないから」

咲に話しかけたはずなのに、いつの間にか咲をほったらかしにして 口げんかをしていることに気づいた。

「ね、ねえ 咲ちゃん。最近、仕事どう? 疲れてない?」

「はい、ありがとうございます。大丈夫ですよ」

はっきり言って、咲はチャラ男は大嫌いである。だが先輩というのもあって、露骨に嫌っては失礼だと思うから一生懸命笑顔を振りまいている。

「咲さん、そんな無理に笑うことないですよ。逆に顔が引きつってます」

「えっ!？ やだ、私ったら……………」

轟に指摘され、顔を赤くして そそくさと空になった皿の乗ったプレートを持って、席を立った。

「じゃあね、轟さん、響さん」

さっさとプレートを返して食堂を出て行ってしまった咲を見て、響は残念そうな顔をした。それから、向かいに座っている轟をにらみつけた。

「お前な! 女の子にあんなこというとか、ホント最低だな!？ 引きつってるとか言われて 女の子が喜ぶわけないだろ」

一気にまくし立てる響に対して、轟はもくもくとカツ丼を平らげていく。

「あなたのせいでしょう。咲さんも、本当に苦労していますよね。どっかの草食動物に付きまわられて、無理矢理笑って……………」

「はあ? なにそれ、「草食動物」って。まさか、まだあのネタ引きずってんの? ガキか!」

ふははは、と笑い声をあげる響。

「あなた、周りが見れないんですか? 見てみなさい、周りの社員たちですら「うるさいなあ……………」って顔で見てますよ」

そう言われ、初めて周りを見渡してみた。

なるほど、目が合っただけですぐに目をそらしていったが、みんな眉間にしわを寄せていた。「うるさいなあ……………」。「顔に書いてある」「目は口ほどにものを言う」とは、まさにこのことだった。

「では、私はこれで」

カツ丼を食べ終わった轟は、プレートを持ってすばやく食堂から出て行った。

「あっ、てめっ……。逃げんな！！」

後ろから草食動物の声が聞こえてきたが、轟は無視してボソリとつぶやいた。

「どっちがガキだか」

一方、小野 美恵はというと。

彼女の願いは叶えられ、想像もできないほど裕福な暮らしをしていた。

豪華な屋敷に住み、使用人なども雇った。毎日高級な店で服や靴を買い、宝石などもほとんどオーダーマイドだった。一流の屋敷に住み、一流の食べ物を食べ、一流の服を着た。

そして彼氏もできた。優しい顔をした青年で、美恵より何歳か年下の 大きな夢を見る男だった。

「ねえ、美恵え。また、金貸してくんない？」

そして、毎日のように彼氏から金を貸してくれと言われた。

「またなの？この前貸したばかりじゃない。働いてるの？」

「働いてるよう。それでも、全然追いつかないんだよね。ねえ、お願い。僕たち、付き合ってるんだよね？」

傍から見ていればうざったいことこの上ないが、「恋は盲目」はよくいったもので。こういう場合、だいたいは片方が相手の魔力にでもやられたかのように、逆らえなくなっている。

人間とは、だれもが弱者で 誰もが悪魔になりうるのだ。

「仕方がないわね。はい」

簡単に金を渡してしまう美恵。 にこにこ笑いながら受け取る彼氏。

はじめの彼氏も、こんな風に金を奪ってどこかへ消えてしまったのに、性懲りもなくまた繰り返してしまっている。

こういう場合だけは、「だまされるほうも悪い」というのだろう。

「あら？」

使用人から手紙を受け取り、美恵は首をかしげた。

「うん？どうしたの？」

彼氏が手紙を覗き込んできた。

手紙は、ラブレターだった。 会社の同僚から、よくラブレターが届くのだ。 だが、はっきり言って顔がまったくタイプではない。金もない。 恋人としては、美恵にはとても見てもらえていなかった。

「なに、この男？ 美恵の知り合い？美恵、この男と付き合ったりしてないよね？」

彼氏からしてみれば、美恵はただのサイフ。 財布の中の金を横取りされたくないだけなのだ。

「いいえ、なんでもないわ。私にとっては、あなただけだもの」

ポケットにラブレターをしまいこんだ美恵。 そして、彼氏に笑顔を向ける。

「わーっ！ありがとお、美恵ー！」

数年後。

美恵は醜い老婆に代わっており、ほとんど廃人になっていた。

金は相変わらず腐るほどある。　だが、なにか大切なものがぽっかりと抜けてしまっていた。
2番目の彼氏に逃げられた。　借金までこしらえていったが、金だけはあったので問題なかった。

3番目、4番目、5番目、6番目・・・・・・・・・・。

何人恋人を作り、何人恋人に裏切られただろうか。　みんながみんな、金目当てだった。

こんなことだったら、あんな悪魔の誘いになんか乗らずに、さっさと飛び降りて置けばよかった。　そうすれば、こんな孤独と飢えと嫉妬と憎悪にまみれた、醜い感情に心を巣食われることもなかっただろう。

生きることは、死ぬことより辛い気がする。

「もう満足ですか？」

カーテンから漏れるわずかな光のみの薄暗い部屋のなかに、懐かしすぎるあの声を聞いた。ボサボサの髪を振り乱して振り向いた美恵の先にいたのは、あのときの悪魔だった。　室内だからなのか煙管こそふかしていないが、つやつやの黒い靴は履きっぱなしだ。

「お久しぶりです、小野　美恵様」

のんきに挨拶をする悪魔に、美恵は飛び掛った。　あっさりと腕をつかまれた轟だが、その枯れ枝のような腕にはほとんど力がこもっていなかった。

そのままガクガクと轟を揺さぶり始める。　轟は、逆らおうと思えば簡単に逆らえるのだが、今は思うようにされてやろうと思った。

「あんたのせいよ」

がらがら声で、美恵はつぶやいた。

「あんたのせいよ！」

こんどは叫んだが、ようやく聞き取れる程度の声量しか出ていなかった。

だがその形相だけは恐ろしかった。「魔女か」。轟は口にこそ出さなかったが、心底そう思った。

「あんたが余計なことをしたせいで、私は・・・・・・・・。私はあ・・・・・・・・！！」

誰に向けたらいいのかわからない感情を、必死に轟にぶつけようとしていた美恵を見て、轟は目の前の老婆に変わり果てた美恵を、「愚か」を通り越して「健気」にすら思えてきた。

「契約、どうなさいますか？」

揺さぶられたまま轟は尋ねた。　美恵の腕が止まった。疲れたのか、悪魔の来た理由を思い出したのか。

「もう魂をいただいてもよろしいですか？それとも、まだ生にしがみつきますか？　大丈夫ですよ、こちらは永遠に待っていますから。　ご心配なく。確実に　あなたの魂をいただきます」

たんとんとそう言う轟に、美恵は何かを言う元気が起きなかった。

「・・・・・・・・もういいわ。魂、持って行ってちょうだい」

案外簡単に答えたので、轟は目を見開いて驚いた。

「よろしいんですか？ 魂を取られた後に、「やっぱ無し」は通じませんか？」

「いいって言ってるでしょ。もう、いいのよ」

轟の両腕をつかんでいた腕をだらりと下ろし、髪で顔を隠しながらつぶやく。

「金のある生活、楽しかったわ。 たくさんの人間にちやほやされて、見たこともないような高価なものが次々と自分のものになって……。 こんなに自分勝手に暮らしたんだもの。

悔いなんてないわ」

契約の呪文を唱えようとしていた轟が、口を開いた。

「雰囲気、変わられましたね。初めてお会いしたころより、ずっと……………」

「年寄りくさくなったわね。実際に年寄りだもの」

ふふ、とうつむいたまま笑う美恵。 微笑み返す轟。

轟が呪文を唱え始めた。 美恵の身につけていたペンダントが、輝き始める。

「ああ……………でも……………」

遠のく意識の中で、美恵がつぶやいた。

「たった一度でも、心から愛されてみたかったなあ……………」

一筋の涙を流しながら、美恵の胸から、ふわりと青白い炎が出てきた。

ペンダントの光が消え、青白い炎を轟が左手で受け止めた瞬間に、美恵の肉体はどさりと床に倒れた。

「愛とは……………」

部屋の隅に束になったラブレターを、目の端で確認しながら 轟はつぶやいた。

しゃがみこみ、遺体となった美恵の首からペンダントを回収する。

「誰もが一番欲しているのに、一番気づけない存在なのかもしれませんね……………」

「お疲れ様でした、轟さん」

会社に戻り、咲にバツタリ会った。咲はたくさんの書類とファイルを抱えていた。

「お疲れ様です、咲さん。書類整理、大変ですね……………」

書類上の仕事はあまり好きではない轟は、眉間にシワを寄せた。

「ふふ……………まあ、仕方ないですよ。私は社員ですから。これぐらいのこと、頑張らないと」

「あとで手伝いましょうか？書類の仕事はあまり好きではないんですが」

「あら、お願いできますか？それじゃ、少しだけ……………」

と、轟と咲が会話しているところに、あの声が飛び込んできた。

「咲ちゃ～ん、聞いてよ～！今担当している男がさ、ひっどいんだよ～？」

制服である黒い帽子を脱ぎながら、響が会話に割り込んだ。頭をガリガリと乱暴にかくものだから、黒い髪がひどく乱れた。

「チッ……………。草食動物が。仕事にグチグチ文句言ってんじゃねえよ……………」

「ああん！？」

なにやら悪口を言われ、響はドスをきかせて轟を睨み返した。

「お前こそ、グチグチ悪口言ってんじゃねえよ。やっぱガキだな」

「ガキって言う方がガキなんですよ。少し悪口を言われただけで……………。大人気ない」

「自分が元凶って自覚してんじゃねえか！！」

ふたりが口喧嘩をしているのを傍で見ていて、咲は（面倒くさい人たちねえ……………）とため息をついていた。

轟は礼儀正しい人なのだが、怒らせたりすると面倒臭い。

響はチャライ男であるうえに、怒らせると轟以上に面倒臭い。あ、これは相手が轟だからだろうか。彼は女性には優しいから、女性相手なら引いてくれるだろう。

「つーか、お前。すごい隈できてるぞ。寝てんの？」

「生憎、私はあなたほどのんびりしてられないんですよ。どうせあなた、仕事が終わったら花街にでもいくつもりなんでしょう？こっちは報告書提出してから、残業の手伝いまで約束して、さらにその後も……………」

「だーっ、面倒臭い！なに？何が言いたいわけ？僕もお前の残業手伝ってか！？死んでもやるか！！」

「ほう。その残業が、じつは咲さんの物ででもですか？」

その言葉に、響の体がガチッと固まった。

「残念ですね、咲さん。いつもはあんなにお優しい先輩でも、流石にここまでの残業は手伝えないそうです。そんな残業よりも、自分の愚かな欲の為に、花街に行くのを優先なさるんだとか……………。まあ、先輩の意見なら、尊重すべきですよ。だって、先輩なんですから」

一気にまくしたてる轟。響きは固まったままの姿勢で、悶々と残業か花街かを心の天秤にかけていた。どちらも、見事と言わざるを得ないほどに釣り合っている。

「そうねえ、年上の人の意見は尊重すべきだわ。仕方が無いし、二人で書類片付けちゃいましょうか」

(ふたりだとおっ!?)

そんなことは聞いていない。響の中の心の天秤は、一瞬で「残業」のほうに傾いた。

「咲ちゃんと言うなら、仕方がないなあ。いいよ、僕も手伝ってやるよ」

無理やり笑って、格好つけようとしている響。だが、まだ心の隅に（花街に行けばよかった！！）と後悔していた。

「ワア。サスガセンパイデスネ。タヨリニナリマス」

「てめー、棒読みじゃねーか！もっと感謝しろ！」

相も変わらず、今日も「GEHENNA」は忙しい。